

有象無象

菊池亮太

雨の駅のホームで

「歩きスマホはやめてください」

男の声がした。

男の目には女が映っていた。

女は答えなかった。

「聞いていますか」

また男の声がした。

女は迷惑そうな顔で男の顔を目に映した。

「歩きながらいじる必要はありますか」

「危ないとは思わないんですか」

「何かあってからでは遅いんです」

男は女に近寄って捲し立てた。

女は答えなかった。

女は未だ、携帯を弄っていた。

「答えてください」

男は語気を強めた。

女は何も言わなかった。

周りの人々は、揃って女のいる方を見ていた。

まるで異常者を見るような目だった。

女は、ばつが悪そうにその場を立ち去った。

女は最後まで何も言わなかった。

周りの人々は、未だに異常者を見るような目をしていた。

女が立ち去った後も、同じ場所を見つめていた。

男の姿も、既にそこにはなかった。

誰もいないその場所には、誰もがいた。

有象無象として、誰もがそこにいた。